

# この本と私

読むことで  
気付くこと  
書くことで  
判ることがある



## 「おくりびと」

百瀬しのぶ 著

同名の映画のノベライズ作品です。家人が読みかけていたものを、何気なく手に取り、読み始めたところ、一気に最後まで読み通しました。面白かったです。

「おくりびと」という言葉には、ふたつの意味が込められていました。ひとつは主人公の職業である納棺師の事。遺体を拭き清め、装束を整え、棺に納める仕事です。亡くなった人を「違う世界に旅立って行く人」とし、旅の支度を整えることで、その人を送り出す遺族の心の準備を手助けをします。「おくりびと」のもうひとつの意味は、遺された人々の事。身近な人の死に出会い、とまどい、悲しみ、受け入れていく様子が丁寧に描かれています。

作品中で印象的だったのが、「石文」です。相手に対する自分の気持ちを表したような、形や手触り、大きさの石を相手に渡し、気持ちを伝えるというものです。作品中では、主人公が幼い頃に川原で父親と石を交換するシーンが描かれていました。主人公の父親は、「人がまだ言葉を持たなかった頃、自分の思いを相手に伝えるために石文を使った」と言っています。私が、人が言葉を獲得した後に「石文」ができたのではないかと考えています。言葉では表し切れない自分の気持ちを、なんとかして相手に伝えようとする、音楽や絵画にも共通する人の思いではないでしょうか。

今の自分の気持ちを石にしてみたら・・・石というより、『小石の集まり』というような状態です。

宇響



小学館文庫

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞